HOTJeT 2025

北海道・東北の日本語教師養成の今

北海道・東北ブロック
日本語教師養成実施機関連絡協議会

文部科学省委託日本語教師養成・研修推進拠点整備事業

文部科学省　日本語教師養成・研修推進拠点整備事業

北海道・東北ブロック

日本語教師養成実施機関連絡協議会（HoT-JeT）

日本語教師養成・研修推進拠点事業とは？

本事業は、文部科学省が日本語教育機関の認定制度及び日本語教師の新たな国家資格創設に際して必要な基盤整備として行うもので、全国６ブロック（北海道･東北、関東、中部、関西、中国･四国、九州･沖縄）で日本語教師養成・研修を担う高度な専門人材の育成、地域のニーズに応じた養成・研修を行う人材の育成・確保を推進する拠点整備を目的としています。

HoT-JeT の目的

北海道･東北ブロック日本語教師養成実施機関連絡協議会（通称 :HoT-JeT）では､以下のことを関係機関、組織、団体等と連携しながら進めます。

- 東北大学を拠点として、北海道・東北ブロックにおける日本語教育の方向性を共有し、日本語教師の養成・研修・活用に関わる関係機関、組織、団体等が参画するネットワークの構築を目指します。
- 日本語教師養成や研修の担い手を対象とした研修の実施や好事例の共有等、日本語教師養成・研修を担う高度人材の育成を図る拠点整備を進めます。
- 養成機関等や日本語教育を取り巻く環境の地域差、養成課程・講座修了者の職業選択の問題、雇用のミスマッチ、日本語教師不足など、ブロック内の日本語教師の養成･確保に関する課題･ニーズを共有し、課題解決に向けて協議します。
- 養成課程・講座修了者が「日本語教師」として活躍するための就業支援を行います。
- 「登録日本語教員」となるための養成・実践研修の質的維持向上を目指します。
- 社会において必要な専門人材として日本語教師が評価され、適切な配置確保、処遇改善につながることを目指します。

HoT-JeT に関する詳細および最新情報はウェブサイトをご覧ください。

https://www.hot-jet.jp/

北海道・東北の登録実践研修機関・登録日本語教員養成機関

北海道・東北の登録実践研修機関・登録日本語教員養成機関のみなさんに、その課程の特色や工夫についてご紹介いただきました。国内外での多様な実践研修の様子や学内の関係部署と連携した取り組み、地域での実践など、それぞれの養成機関の特色や工夫を知ることができるとともに、それらがどのようにそれぞれの養成課程で位置づけられているのかも知ることができ、北海道･東北における登録実践研修機関･登録日本語教員養成機関のあり様をうかがい知ることができるのではないかと思います。

これらの紹介記事を通して、養成機関同士が互いに知見を深めることができ、また日本語教育機関をはじめとしたさまざまな教育現場の方々にも、教員養成の現場でどのようなことが行われているのか、ぜひ知っていただく機会になればと思っています。そしてこれらの記事が日本語教育の未来を担う人材の育成に役立つ一助となり、北海道・東北の日本語教育に関わる現場をつなぐものとなることを祈っています。最後に、ご執筆にご協力くださった登録実践研修機関・登録日本語教員養成機関の担当者の皆さまに改めて心より感謝申し上げます。

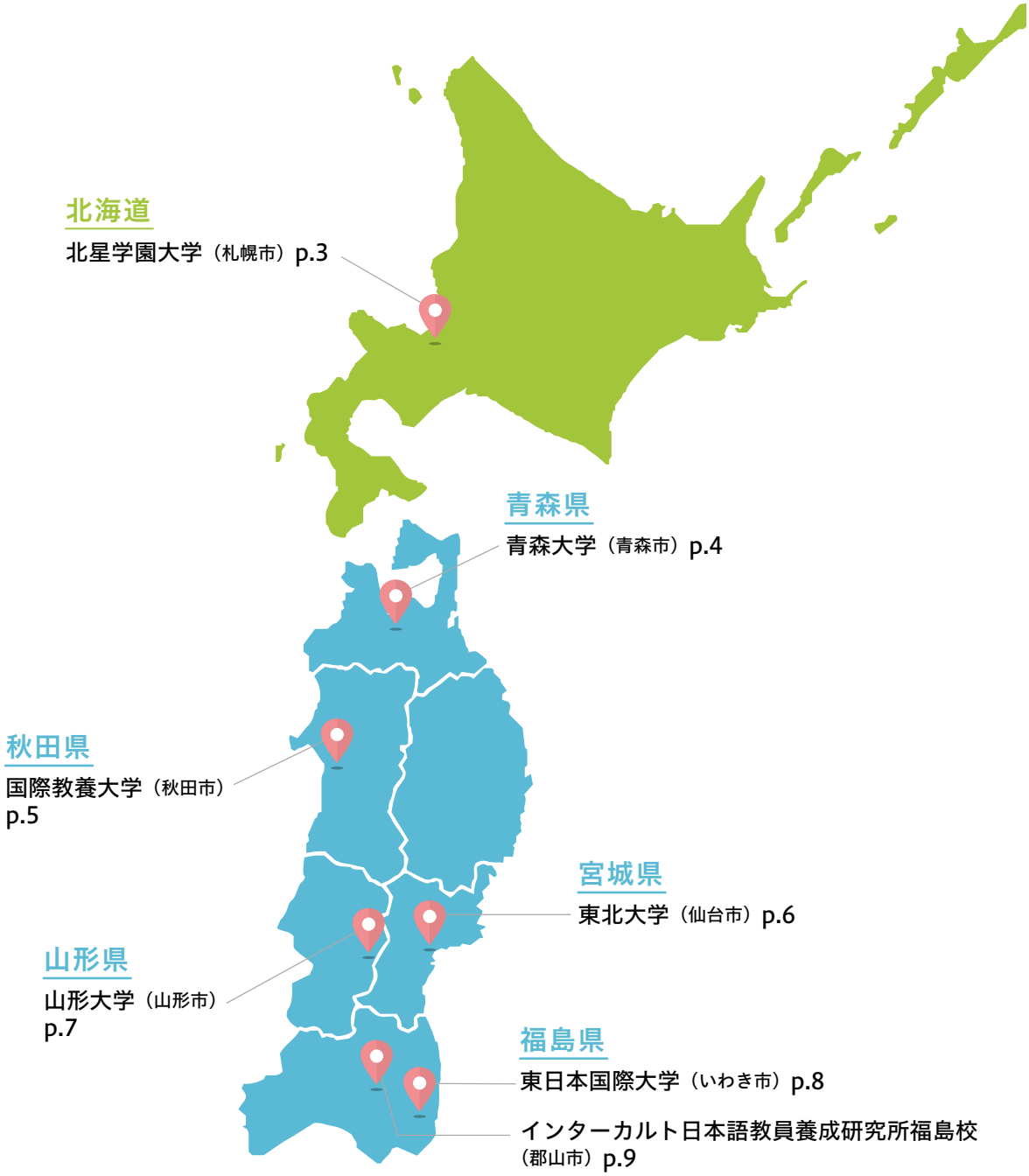
また、これらの記事は「HoT-JeT リレー：北海道・東北の登録日本語教員養成機関の紹介」としてHoT-JeT のウェブサイトで公開しております。今後も引き続き北海道・東北の登録実践研修機関・登録日本語教員養成機関の紹介を行っていく予定ですので、続編はぜひウェブサイトでご覧いただければと思います。

なお、今回掲載されている記事は、2025 年度時点の情報となっています。最新の情報は各機関にお尋ねください。

「HoT-JeT リレー：北海道･東北の登録日本語教員養成機関の紹介」
はこちらからご覧ください。

https://www.hot-jet.jp/report/

本紙に掲載している登録実践研修機関・登録日本語教員養成機関



※ 2025 年度現在、ヒューマンアカデミー札幌校、ヒューマンアカデミー仙台校も登録実践研修機関および登録日本語教員養成機関として登録されていますが、本紙には掲載されていません。

北星学園大学
日本語教員養成プログラム

設置の背景

明治期にキリスト教宣教師によって創立された学校を源流にもつ北星学園大学は、建学以来、「人間性」「社会性」「国際性」を基本理念としています。2026 年 4 月に本学文学部に開設されることになった「日本語教員養成プログラム」は、本学の伝統を引き継ぐ新たな教育課程として計画されました。

プログラムの特色

本プログラムの特色の一つは、教壇実習が本学のある札幌市から直線距離で 300㎞離れた中標津町（人口 2.2 万人）の「ひがし北海道日本語学校」で行われる点にあります。同校を運営する学校法人は根室の振興局および教育局と連携協定を締結していて、また、同校在校生には中標津町から就学支援金が支給されています。在校生は午前あるいは午後に同校で日本語の授業を受け、授業のない時間帯には町内の企業で就労したり、地域住民とさまざまな形で交流したりしています。中標津町にとって同校の生徒は地域産業の支えとなっており、町に活力を与える貴重な存在として歓迎されています。

本学の養成プログラムは、現地での教壇実習も含め、受講生が日本語教員として教室の中で日本語を指導している自己をイメージするだけでなく、地域に住む外国人と日本人住民の橋渡し役となり、両者が共生していくことをサポートするコーディネータ役として活動をしている将来像を描きながら学べるように設計されています。同時に、大学としても、地方の活性化や共生社会の実現という課題に対しどのように向き合い貢献することができるのか、そうした大きな社会的試みとして日本語教員養成プログラムを位置付けています。

「ひがし北海道日本語学校」および中標津町との協働は、本プログラム計画段階の 2025 年度から既に始まっていて、9 月には本学学部生のグループが同町の「大学交流推進事業」によって現地を訪問し、同校の見学、町主催の多文化交流イベントへの参加（下の集合写真）、小学校訪問、地元企業の視察等を行っています。

プログラムの課程

本学の養成プログラムでは、以下のような科目群を文学部 2 学科の学生に提供します。科目担当者は全員が日本語学、言語学、言語教育学、異文化コミュニケーション学等を専門領域とする本学の専任教員で、日本語教育および日本語学関連の新設科目を除いては、既存科目をそのまま養成プログラムに取り入れた形となっています。

これまで本学では日本語教授法の授業が 3 科目開講されていました。しかし、養成課程は存在しなかったため、26 年 4 月の新規開講時にどれだけの新入生がこのプログラムに興味を示し履修するのか、3 年目に実践研修（定員 10 名）を希望する学生がどれだけ出てくるのかは、なかなか予測が難しい状況です。プログラムを運営しながら見極めていくことになります。

（文学部英文学科　柳町智治）

	1年次	2年次	3年次
前期	社会言語学概論 日本語学入門 異文化コミュニケーション概論 I	日本語教育入門 II 日本語学 II	日本語教授法 II 言語学
後期	日本語教育入門 I 日本語学 I 異文化コミュニケーション概論 II 応用言語学概論	日本語教授法 I 国際教育論	日本語教育実習

日本語教員養成プログラムの履修モデル

青森大学
青森大学日本語教員養成プログラム

日本語教師として「地域」とともに生きる

北に陸奥湾、南に八甲田連邦と、豊かな自然に囲まれた青森大学では、「地域とともに生きる大学」を理念にさまざまな地域貢献活動に取り組んでいます。その一つが「多文化共生」です。青森県の在留外国人数は 8,000 人を超えていますが、日本語教室のない市町村がほとんどで地域格差や人材不足が喫緊の課題となっています。本学では 2019 年より「日本語教員養成プログラム」を開設し、地域特有の課題解決に向け、多様化する学習者のニーズに対応できる日本語教育人材の育成に取り組んでいます。

本学のプログラムの特徴は、多様な背景を持つ受講生が一緒に学んでいることです。学生たちは、学部横断プログラムとして文系・理系の区別なく受講でき、プログラムの必修科目として取得できる単位のほとんどは、各学部の卒業要件単位として認められます（一部養成科目と実践研修科目を除く）。また、学部を問わず受講できるよう土曜日を中心に授業を開講しており、リスキリング・リカレント教育としての社会人の受け入れも積極的に行っています。そのため、年代も 10 代後半から 70 代の方まで、職業も学生、会社員、公務員、教員、主婦など、さまざまなバックグラウンドを持っている方々が一緒に学んでいます。

もう一つの特徴は、地域貢献活動が修了要件の一つになっていることです。本学と青森県観光国際交流機構との連携協定に基づき、本学のプログラムの一部が「青森県日本語指導サポーター養成講座」（図 1 参照）になっており、受講 1 年目から日本語指導サポーターとして登録され、学内外で活躍できます。県内各地で実施される交流型日本語教室に参加したり、小中学校へ子どもの日本語支援に出向いたりして経験を積み、実践的なスキルを身につけます。実践研修課程の教育実習では、学部留学生を対象に教壇実習を行いますが、このような地域活動を中心とした学びを重視することで、指導の幅を広げるだけでなく、外国人住民と顔の見える関係を築くことや居場所づくりの大切さも学びます。

本学のような地方の小さな私立大学の場合、課題も少なくありません。まず、専門分野の教員が限られるなど、学内リソースが限定的になりがちです。本学では学内外の資源を見直し、オムニバス形式の授業やライブ配信型の遠隔授業を活用して、多様な専門分野の教員から専門性の高い知識が学べる機会を増やしています。また、国家資格化により今まで以上にハードルが高くなったことで、受講希望者の減少やドロップアウトする学生が増えることが懸念されます。そのため、本学では複数の履修モデルを示して、個々の希望に沿った履修指導を丁寧に行うようにしています。さらに、キャリア支援のリソースも限られます。県内には日本語学校が 1 校しかなく接点が少ないため、イベントや勉強会などを通して留学生や先生方との交流を深めることで、将来のキャリアを考える機会を提供しています。

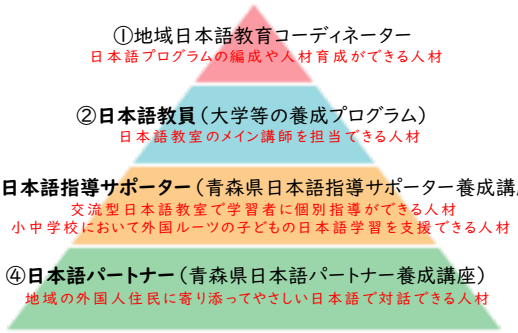


図 1 青森県における日本語教育人材育成のイメージ

青森大学日本語教育センター HP:
https://www.aomori-u.ac.jp/japanese_language_education- center/
公益社団法人青森県観光国際交流機構 HP:
https://www.kokusai-koryu.jp/

（青森大学日本語教育センター長 石塚 ゆかり）

国際教養大学
日本語教育実践領域

国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科は 2008 年 4 月に開学し、同研究科の日本語教育実践領域（JLT）は日本で唯一の日本語教育専門の専門職大学院として、16 期生までの修了生 109 名を輩出してきました（2025 年 8 月現在）。そのうち 6 割以上が国内外の日本語教師または日本語教育関連の仕事に従事しています。修士課程のみですが、専門職大学院であるが故に、大学院修了後にすぐ教壇に立てる、高度専門職業人としての日本語教師の養成を目指しています。

JLT は、修士課程 1 年次に日本語教育に必須の 50 項目を含む言語学・応用言語学分野の科目を履修し、2 年次には秋学期・冬期プログラム・春学期の各期に教育実習を行うことにより、理論と実践を架橋できるプログラムになっています。1 年次・2 年次とも国内外での教育経験豊富な専任教員が指導にあたりますが、特に 2 年次の教育実習コースでは全教員が担当となり、実習生は複数の教員（又は全教員）から指導が受けられる体制になっています。

JLT の主な特色として、以下のようなことが挙げられます。

1）**質量豊富な教育実習：**修士課程 2 年次の秋学期に文法シラバスの初級教科書を使って本学留学生を相手に日本語文法項目の指導を行います。次の冬期プログラムでは、台湾の提携大学からの初中級レベルの短期交換留学生に対して、教科書を使わず、彼らのニーズを反映するタスクベースの指導を行います。最後の春学期には、実習生が複数の海外提携大学に分かれて派遣され、現地の学生のための特別授業を開講して冬と同様に学習者のニーズに合ったタスクベースの授業を行います。

2）**多国籍・多文化の生活・教育環境：**本学のキャンパスには 50 以上の国・地域から 200 名以上の留学生が集まります。普段の生活でも彼らと接する機会は多く、教育実習のみならず、チューターやボランティアとして日本語学習のサポートをしたり、イベント等で文化交流をしたりする機会に恵まれています。

3）**実際の現場で自己成長を続ける省察的実践家の養成：**修士課程 2 年次の教育実習を通して行うアクション・リサーチを通じて日々の教育実践の振り返りと改善を行う自己研修能力を身に付けます。冬と春に行われる教育実習ではグループでの指導となるため、他の同僚教師との協働といったスキルを身に付けます。また、それらの教育実習では日本語指導だけでなくプログラムの企画・運営も行い、関連部署やスタッフとの連携を含むコーディネーション能力も身に付けます。

JLT では今後も引き続き、時代の要請に応じ、登録日本語教員や国内外で活躍できる日本語教員の養成に取り組んで参ります。

（国際教養大学専門職大学院　日本語教育実践領域　堀内 仁）

秋の教育実習

冬の教育実習（フィールドトリップ）

冬の教育実習（授業）

冬の教育実習（雪だるま作り）

春の教育実習（1）台湾

春の教育実習（2）マレーシア

東北大学
登録日本語教員養成プログラム

「登録日本語教員養成プログラム」の位置づけ

東北大学文学部には、26 の研究室があり、その中の 1 つ日本語教育学研究室で「登録日本語教員養成プログラム」が運営されています。学生たちは、文学部の学生として入学し、2 年生になる際に研究室に配属され、専門が決まります。研究室に配属されると同時に、「登録日本語教員養成プログラム」が始まり、3 年生後期の実践研修に向けて科目履修を進めていきます（図 1）。

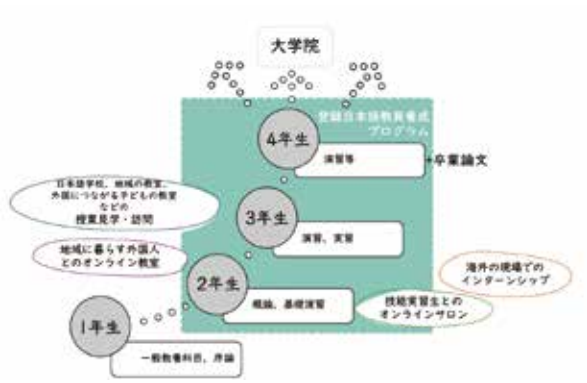


図 1「登録日本語教員養成プログラム」の位置づけ

養成したい人材像

本研究室が運営する「登録日本語教員養成プログラム」では、グローバル化・多様化の進む社会において、日本語学習者に応じた適切な学習環境をデザインできる日本語教師の養成を目指しています。同時に、社会における異なる文化背景をもつ人同士の関わりに際して、互いに人として尊重し合いながら、課題を共有し、ともに解決していくための資質・能力を備えた人材の育成も目指しています。

学習内容について

○2 年生：日本語教育学の基礎をつくる

2 年生では、日本語教育学における基礎的な知識と考え方を学びます。社会における日本語教育の意義や制度、日本語を教える際の日本語の捉え方、言語の習得過程や学習、日本語を学ぶ学習者の多様性、日本語教師に必要となる資質・能力、日本語によるコミュニケーションなどについての授業があります。講義形式のものもありますが、他の学生とディスカッションをしたり、日本語学習者と実際にコミュニケーションをとったり、教案をつくって模擬授業をしたりと実践的な形式で行われます（写真 1）。

○3 年生前期：より実践的、専門的な内容へ

3 年生以降の授業では、日本語教育に関する、より実践的、専門的な内容を扱います。教材分析、コースデザイン、シラバス、カリキュラム、教室活動、教案作成、模擬授業、テストと評価などについて具体的に学び、3 年生後期に行われる実習につなげます。またこれらの実習に直結する実践的な授業以外にも、文学部の他の研究室が提供する多様な科目を受講することによって、多角的な視点から日本語教育を捉えると同時に、日本語教育に関する専門性を高めます。

○3 年生後期：実際に学習者に教える

実習は 3 年生後期に行われ、実践的な教育能力養成の場となっています。研究室で運営している東北大学の留学生や研究員を対象にした夜間日本語コースで、これまでの授業で学んだ知識やスキルを生かして実際に教えるだけではなく、コースの企画・運営・評価も教員とともに行い、主体的にコースに関わります。教壇実習では、自分の授業を録画して、授業後に授業分析やディスカッションを行い、授業改善を繰り返しながら教育実践力を高めていきます（写真 2）。

詳細は東北大学文学部日本語教育学研究室のウェブサイトをご覧ください。

https://nik-tohoku-u.jp

（東北大学文学部日本語教育学研究室　島崎 薫）

写真 1　授業の一環として実施されている留学生との会話セッションの様子

写真 2　教壇実習の様子

山形大学
日本語教員養成プログラム

山形大学は 2025 年 5 月に「登録実践研修機関」「登録日本語教員養成機関」として登録され、全学対象の「日本語教員養成プログラム」を同年度後期から 1 年生を対象に開始しています。

山形県の状況について

山形県は、外国人散在地域で日本語教育資源に乏しい県です。文部科学省（2024）の調査結果によると、「日本語教育を主たる業務とする常勤の日本語教師」は 7 人で全国最下位[注]、ボランティアの割合は約 71% で全国 4 位です。生活者としての外国人に対する日本語学習支援がボランティアに依存している実態がわかります。一方、労働者を中心とした外国人の増加、多様化、定住化が進行おり、在留外国人は 10,535 人（2024 年末現在）で、対前年比増加率 13% と、全国平均の 10.5% を上回っています。こうした状況下、日本語教員を養成する県内唯一の機関として、量的・質的に日本語教育人材を充実させることは喫緊の課題です。

プログラムで意図したこと

まず、「日本語教育の参照枠」の言語教育観、つまり「1 日本語学習者を社会的な存在として捉える」、「2 言語を使って『できること』に注目する」、「3 多様な日本語使用を尊重する」に則って教員養成をすることです。また、前述のように山形県は外国人散在地域で、学生が外国人と交流する機会も限定的ですから、留学生を含む外国人との接触・交流の機会を増やすことを意図しました。その経験を通して、自分の日本語を調整する力、自文化を相対化できる力、学習者の日本語・日本語学習を観察し分析・考察する力の育成を目指しました。このような目標を掲げる科目には、次のような内容の活動があります。

- 日本人学生と留学生が、ディスカッションやプロジェクトワークをとおして交流・協働する。
- 日本語初級レベルの授業に入り込み、ロールプレイや作文のモデル作成、学習者の発話や作文へのフィードバックを実践しながら学ぶ。
- 学習者へのインタビュー音声をもとに、日本語使用場面、学習ニーズ、日本語の特徴を分析する。
- 大学の日本語授業、地域の日本語教室に入り、教師あるいは学習者に焦点を当てて授業を観察しグループで分析する。

一方で、教室活動、教科書分析、教案作成等、理論を理解するだけでなく実践することに特化した演習も提供することで、知識・技能・態度を一体的に育成することを目指しています。

その結果として、質の保証された日本語教育を行うことのできる教員を輩出すること、その教育実践によって、外国人が自立した言語使用者となり、地域社会の発展に貢献できるようになること、教員の働きかけによって、日本人が外国人理解の重要性と対話の必要性を認め実践するようになることを目的としています。

参考

出入国在留管理庁「令和 6 年度末現在における在留外国人数について」
文化審議会国語分科会（2021）「日本語教育の参照枠　報告」
文部科学省（2024）「令和 5 年度報告　国内の日本語教育の概要」
山形大学「日本語教員養成プログラム」
https://www.yamagata-u.ac.jp/jp/faculty/promotion-of-international-exchange/01/nihongokyouin/

注　2025 年 11 月 1 日発表の「令和 6 年度報告　国内の日本語教育の概要」では常勤の内訳が示されず単純な比較はできなくなっているが、合計数は変わらない。また、ボランティアへの依存率は 76% に上昇している。

（山形大学学士課程基盤教育院 内海由美子）

東日本国際大学
日本語教員養成課程（副専攻）

設置の背景

現在、経済学系と福祉系の 2 学部からなる東日本国際大学（福島県いわき市）は、短大時代の 1985 年から同じ敷地内に留学生別科（現在入学定員 80 名）を有し、国際色豊かなキャンパスとなっています。

1995 年に四年生課程の東日本国際大学が設置されたのちも、そうした伝統を引き継いできましたが、2011 年の震災後、留学生の出身国が従来の漢字圏中心から非漢字圏へと多様化することで、これまでの蓄積だけでは日本語能力を十分に伸ばせないという課題が生じました。2014 年頃から別科と学部の接続改善、JF スタンダードに基づく教科書の採用、年 2 回の合宿形式での集中講義の開講など組織的な対応を開始したのですが、そのなかで、留学生から「日本語教員になりたいがここで学べないか」という要望や、国内学生からも国際大学固有の経験をさらに深めたいとの声が聞こえてきました。そこで、学内の別科を中心とした日本語教育関連、比較言語学、言語学史、国際（開発）教育、その他関連分野担当教員数名のあいだで調整を進め、3 年程度の準備期間（2018 年 3 月の「日本語教育人材の養成・研修の在り方について」公開後は同文書に準拠）を経て、2020 年度にそれぞれの専門分野（福祉関連職に加え教職や公務員志望を含む）に加えて学べる副専攻として日本語教員養成課程（副専攻）を開始することとなりました。

プログラムの特徴

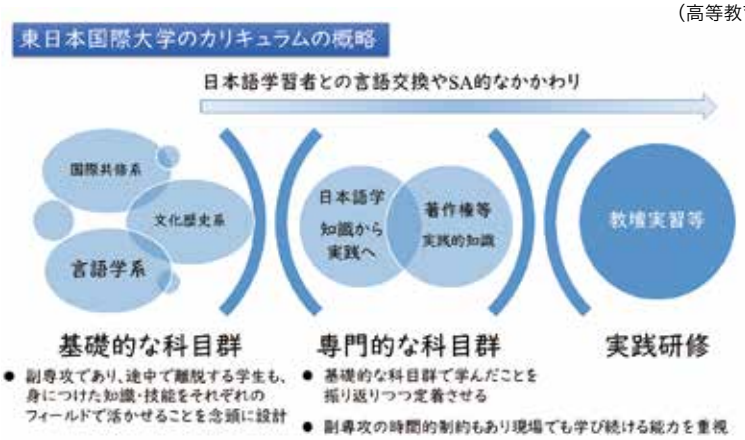
本課程の特徴は、学内に留学生が多く、別科も同じ建物内で行われる環境を活かし、国際理解や異文化への感受性開発に重点を置いたカリキュラムにあります。副専攻でもあり、「入口は広く、出口で深く」という設計思想のもと、既存の国際的な感受性を育てる科目群を最大限活用しつつ、言語学系・言語教育系の科目を追加し、徐々に専門性が高まるように構成しています。プログラムには毎年 10 名前後が新規に登録し、2 年間から 3 年間での履修を想定している副専攻課程のなかで、実践研修段階まで残るのは 3 ～ 5 名程度ですが、そのうち 1 ～ 2 名が卒業時に日本語教育分野に就職しています。日常的に存在する留学生との接点に加え、教壇実習に至るまでに、留学生向けの集中講義で SA 的サポートに入るなど、段階的なプロセスを設定していることもあり、修了生は就職面接で「新卒とは思えないほど慣れている」との評価を受けており、カリキュラムの意図に合致した学修成果が上がっているといえます。

申請に際して

本学は、2016 ～ 2019 年度に大学教育再生加速プログラムテーマ V（2016 ～ 2019）に採択され、現在大学に求められている教学マネジメントの実装を進めました。その際、ロジックモデルを意識しつつバックワードデザインによるディプロマポリシーの各授業への埋め込みを行うために、到達目標を Can-do で書き直し、全授業科目へ分割し埋込みをしていく CEFR 的な発想を、カナダで開発された ICE モデルを利用しつつ、言語教育とは関係のない科目も含め全学で実施したのでした。このことが日本語教員養成課程の必須の教育内容をカリキュラムに展開し、アセスメント手法を考慮する際にも役立ちました。

ただし申請に際して、実践研修については、学内の副専攻という位置づけから当初通年科目として設定し年間を通じて徐々に教壇実習へと至るように設計・運用していたのですが、教壇実習までに必須の内容が身についていることを示すために後期（秋学期）の科目として変更し、これまで前段階として一体で実施していた SA 的な実習活動の一部は別の授業に組み込む必要がありました。

（高等教育研究開発センター　関沢 和泉）



インターカルト日本語教員養成研究所福島校

登録日本語教員養成課程 420 単位時間一体型コース／登録実践研修課程 45 単位時間教壇実習コース

インターカルト日本語教員養成研究所（東京）は 1978 年に設立され、多くの日本語教員を国内外に輩出してきた歴史ある機関です。

2024 年第 1 回文部科学省の審査で登録認可された「登録日本語教員養成課程 420 単位時間一体型コース」は、登録日本語教員養成機関および登録実践研修機関による、新しい国家資格「登録日本語教員」取得のためのコースです。

【養成課程の主な特色】

◯理論科目：著名講師陣による通信講座とオンライン連携

理論科目では、当校含め、山口、福岡、沖縄の全連携協定校において、東京校と同様に日本語教育界の著名な講師陣の講義を通信で受講できます。

オンライン双方向授業では、東京校と全連携協定校を結びワークショップ形式で行い、理論と実践を結びつけ理解を深めます。また、科目に対する質問には、LMS 上で随時対応、回答・解説を得られます。さらに「目的・対象別日本語教育法」では、留学、生活、就労等活動分野別の多様な事例に触れることにより修了後の日本語教師像を描くことができるのも本コースの特色です。

◯実践講座：反転学習と豊富な演習・実習で磨く実践力

実践講座では、動画授業と対面授業を反転形式で学び、経験豊富な教師の指導のもと、日本語教育の参照枠や Can-do 型授業といった多様な授業形態を実践形式で深く学べます。特に、教壇実習では、初級・中上級両レベルで繰り返し演習、教壇実習を行い、実践力を身につけます。教壇に立つのが初めての方にでも丁寧な教案指導を行い、即戦力を磨けるのも、他にはない当校の魅力です。（写真①②）

【福島校としての地域貢献と支援体制】

1）**現場の「リアル」から学ぶ実践的理解：**学習者への理解と日本語教育への興味を深めるため、受講生はもちろん日本語教育に興味のある方を対象に、本校留学生との交流イベントを実施しております。

また、企業で働く外国人就労者を対象とした日本語授業の見学（希望者のみ）も実施し、受講生は日本語教育現場の「リアル」から学べるのも当校の魅力です。

2）**共生社会実現に向けた取り組み：**併設する日本語学科では「地域に開かれた日本語教育機関」として、市内の高校生と本校留学生との交流会を実施する等、地域に向けた取り組みも積極的に行っております。（写真③）

昨年は、日本経済団体連合会産業政策本部上席主幹脇坂大介氏にご登壇いただき、外国人材の活躍と共生社会の実現に向けて、シンポジウムを開催しました。（写真④チラシ）

3）**修了後も続く継続的なサポート：**東京校と連携し、入学から修了、就職活動に至るまで講師とスタッフが一貫したサポート体制を整えております。昨年は「インターカルト福島同窓会」を実施しました。修了生の活躍を知り、縦横のネットワーク構築の良い機会となりました。（写真⑤）

福島校は「修了後も繋がるアットホームな養成機関」として、情報共有の場や日本語教育理解の機会を提供し共生社会の実現を目指します。そして、「福島で日本語教師になりたい」という夢を持つ人々を力強く支援してまいります。

インターカルト日本語教員養成研究所 HP:
https://www.incul.com/jp/yosei/

（インターカルト日本語教員養成研究所福島校 /
福島医療専門学校日本語学科　佐藤 美華）

写真①　福島校 教壇実習

写真②　福島校 教壇実習

写真③　高校生との交流会

写真⑤　「インターカルト福島同窓会」の様子

写真④
昨年のシンポジウムチラシ

養成課程の学生たちが見た
日本語教育の現場と魅力

2025 年 8 月から 9 月にかけて、仙台と札幌で「日本語教育を学ぶ学生のための HoT-JeT 合宿」を開催しました。この合宿は、日本語教育を学ぶ学生が日本語教師の仕事を現場で見学して理解を深めること、また、異なる大学の学生同士が学び合い、つながりを作ることを目的として企画しました。仙台会場は 8 月 24 日～ 25 日（会場：東北大学）、札幌会場は 9 月 10 日～ 11 日（会場：藤女子大学）に実施し、北海道・東北地域の 10 大学から大学生・大学院生計 16 名（各会場 8 名）が参加しました。

今回の合宿では、仙台国際日本語学校、東洋国際文化アカデミー、北海道日本語学院札幌本校、友ランゲージアカデミー札幌校の 4 校にご協力いただき、授業見学や日本語教師へのインタビューを行いました。

1 日目は、訪問校ごとにグループに分かれ、見学・インタビューの準備を行いました。ほとんどの参加者が初対面でしたが、事前のオンライン顔合わせもあり、明るく活発にグループワークが進みました。最後には、合宿の運営教員を相手にインタビューのリハーサルを行いました。

夕方からは、合宿参加者だけでなく現地の大学で日本語教育を学ぶ学生も交えた交流会を開催しました。小グループに分かれて自己紹介を行い、「印象に残っている授業」について話し合いました。お互いの大学の様子を共有する中で共感や発見が生まれ、活発なディスカッションとなりました。その後も一緒に食事をしながら交流を深めました。日本語教育を通して新しい仲間とつながり、刺激を受けた様子がうかがえました。

2 日目の午前は、2 グループに分かれて日本語学校を訪問しました。学校紹介や校内見学の後、授業を見学し、学習者との交流も体験しました。その後、各校 2 名の先生方にご協力いただき、インタビューを行いました。午後は会場に戻り、見学やインタビューの振り返りを行い、記事執筆の準備を進めました。合宿後もオンラインでやりとりを続け、学校訪問で得た学びを記事にまとめました。掲示物や教室の雰囲気、授業中の教師の様子、インタビューでのお話など、大学の講義では得られない「現場」を体験し、日本語教師という仕事への理解を多角的に深めることができたようです。

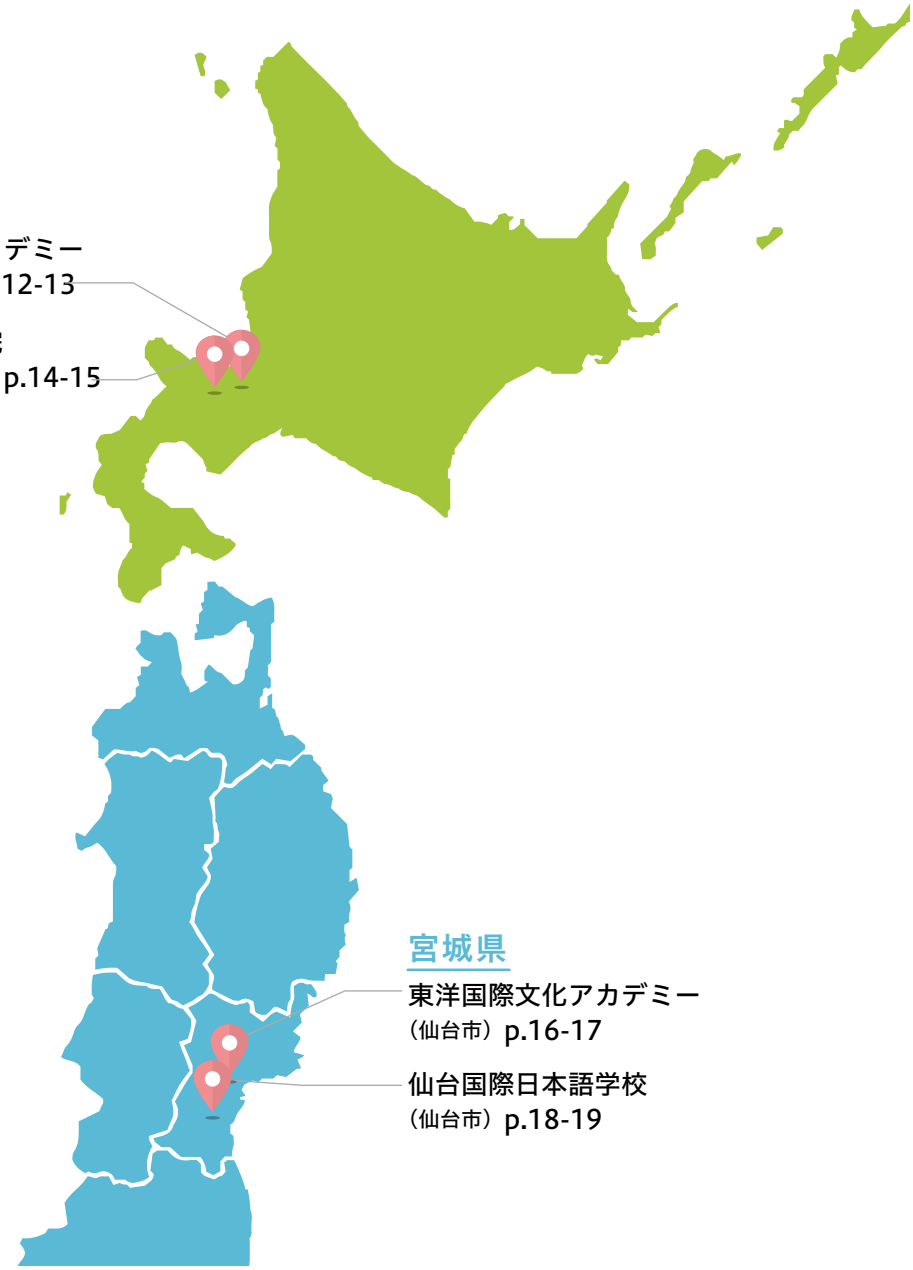
本合宿の成果物として、合宿参加者が日本語学校訪問を通して得た学びを記事にまとめました。ぜひご覧ください。

最後に、合宿に参加してくださった皆さま、そして、貴重な機会をくださった 4 校の日本語学校の皆さまに心より感謝申し上げます。

グループワーク

交流会

2025 年度の合宿で訪問した日本語教育機関



日本語教育を学ぶ学生のためのHoT-JeT合宿2025

私たちが見た日本語教育の現場と魅力　～友ランゲージアカデミー札幌校～

2025年9月10日～11日、北海道・東北地域の大学で日本語教育を学ぶ大学生・大学院生8名が札幌に集まり、合宿を行いました。合宿では、札幌市内にある日本語学校2校を訪問させていただきました。学校や授業の様子を見学し、講師の方々に直接お話を伺うことで、日本語教育の実際の現場とその魅力を学ぶ貴重な機会となりました。本記事では、その体験を学生の視点からご紹介します。

学校の概要・特色

友ランゲージアカデミー札幌校

友ランゲージアカデミー札幌校は、友ランゲージグループの中の一校です。同グループは2003年に東京校を開校し、現在では日本国内外で計5つの日本語学校を運営しています。2025年には文部科学省認定の日本語教育機関として大阪校が開校しました。

今回訪問した札幌校は、2018年に開校し、6年目を迎えました。2025年9月時点での学習者数は103人で、レベルごとに8つのクラスに分かれています。主に午前は初級、午後は中級となっており、中級レベルでは日本語を使ったグループワークなど、活動的な授業が多く行われているそうです。

多国籍であることが特徴的で、ミャンマーやネパール出身の学習者が約半数を占める一方、アジア・欧米・南米など、多様な地域からの学習者を受け入れています。このような多様な母語の学習者が集まる教室環境では、「学習者の共通語が日本語になる」という良さがあると伺いました。実際に、授業などで母語の異なる学習者同士が日本語でコミュニケーションをとっている様子を見ることができました。

また、学校のすぐ近くに寮があり、安心した生活を支える環境が整っています。

授業見学

授業見学では初中級、中級クラスを見学しました。授業内で使用していた教材は『できる日本語』(アルク、2011年出版)でした。

実際に使える「文法」をめざして－初中級クラスの授業見学より－

初中級クラスでは、使役受身の文法がテーマの授業を見学しました。まずは復習として文法の確認を行っていました。先生は、スライドとホワイトボードを併用し、イラストを指したり、途中まで言いかけたりして、文法を学習者から引き出していました。学習者自身に既習文法を使った文を発話させ、つまづいたポイントを適宜確認しつつ、ヒントを出しながら練習を進めていました。さらに、その文法を使って話すときの「気持ち」も丁寧に教えていたことが印象的でした。実際の会話で文章を自然に作る力を育てていると感じました。問題を解いて周りの学習者同士でチェックをする際には、笑顔で学びあう様子が見られました。

学習者主体で活動的な学びを－中級クラスの授業見学より－

中級クラスは、学習した単語や文法の復習が主な内容でした。単語の復習では、先生がジェスチャーとやさしい日本語を用いて確認していたことが印象的でした。文法の復習では、文型に学習した単語を当てはめ、繰り返し声に出していました。ここでは、教師主体ではなく、学習者が主体的に話す機会がとても多いと感じました。最後に、4・5人のグループに分かれ、1人が今回の授業で習った単語のカードを引き、その単語について説明し、他の人がその単語を当てるゲームを行いました。例えば、「津

波」のお題では「海から波が来る」と説明していました。これは、単語の意味も確認しながら自身の力で説明することも求められる練習だと感じました。学習者は、終始明るく積極的に授業に参加していました。

講師インタビュー

「学習者を見る」ー日本語教師は何を意識して学習者と向き合うのかー

オンラインでも日本語を学べる現代に、わざわざ日本語学校で学ぶ意義はやはり「コミュニケーション」、そうO先生は語ります。学習者を見ること、学習者が話しやすい雰囲気を作ることを心掛けているそうです。学習者にきちんと伝わっているか丁寧に確認する。学習者の話を「ちゃんと聞いている」と態度で示す。学習者の名前をしっかり覚えて、指名するときは必ず名前を呼ぶ。様々な工夫をしながら、日々学習者一人ひとりと向き合い、密な関係を築く姿がうかがえました。一方で、日本語教師という立場上、「正しさ」も疎かにしてはいけないとも語ります。そのバランスを取るために、授業目的に応じて、文法に焦点を当てる時・気にせず話してもらう時のメリハリをつけているそうです。そんなO先生に日本語教師をしていて楽しかったことを尋ねると、「日々の授業で更新されていく」という回答が一番に出てきました。毎日が小さな面白い・楽しいの連続なのだろうと想像しました。お話を通して、「学習者とのコミュニケーション」を常に意識されており、それ自体がやりがいに繋がっていることがわかりました。

「新しい考え方に出会える」ー日本語教師の魅力とはー

友ランゲージアカデミー札幌校で教えるN先生に「ズバリ、日本語教師の魅力とは？」と伺ってみました。N先生が挙げた魅力は、「いろいろな国の人と関われること」。同校には、アジアやヨーロッパ、南米など多国籍の学習者が集まっており、日々の授業を通して多様な文化や価値観に触れることができます。その中で、日本人として当たり前だと思っていた考え方が覆されることも多く、N先生自身も「自分の考え方が変わった」と話してくれました。特に印象的だったのは、学習者から学んだ「なんとかなる」という前向きな考え方。異国で暮らす学習者たちのポジティブな姿勢に刺激を受け、自分も柔軟に物事を捉えられるようになったそうです。また、授業を受ける学習者たちが日本語を使いながら楽しそうに学んでいる姿や、できなかったことができるようになった瞬間を間近で見られることも、日本語教師ならではのやりがいの一つであるそうです。国内にいながら世界中の人々と深く関わり、文化を肌で感じられる。そんな経験ができるのは、日本語教師ならではだと感じました。

訪問の感想

座学だけでは想像することが難しい実際の授業風景を初めて間近で見学することができて、とても良い経験になりました。自分たちが気になっていた、リアルな日本語教員の方々の話を聞いたり、日本語教育の現状を知ることで、より日本語教員の仕事のイメージが明確になったと感じました。常に学習者たちの反応や様子などを第一に気にかけて授業を行う先生たちを見て、私自身も将来、学習者にとって頼りがいのある日本語教師になりたいと思いました。

K.S.（弘前学院大学）

日本語教育について、マクロな視点とミクロな視点の両面について、リアルな声や想いを聞くことができました。社会や制度の大きな影響を受けて変化している一方で、その最前線で様々な学習者と関わっていくという側面も持っていることは、日本語教育の世界の大きな魅力だと気づきました。インタビューでも、「日本語教師に向いているのは変化に強い人」というお話があり、心に残っています。今後も広い視野を持って日本語教育に関わりたいと強く感じました。

M.T.（東北大学）

日本語教師として、特に「学生の成長を身近で感じられる」ことに大きな喜びを感じているという言葉が一番印象に残りました。授業を通じて学習者が新しい言葉を使ったり、自信を持って発言する姿を見ると、自分の教えが実を結んでいると実感する事がやりがいに繋がっていると感じました。そんな職業が日本語教師であり、私の人生にとって大きな意味を持つと考え、日本語教師を目指す良いきっかけになりました。

G.H.（東北学院大学）

今回の合宿を通してたくさんの知識と経験を得ることができました。日本語学校見学やインタビューで実際の授業の様子や日本語教師の一日、授業で行っている工夫など、どれもためになることばかりでした。また、自分と同じく日本語教育に関心を持っている同志と出会い、たくさん話し合いながら交流することができて、とても良い刺激を受けました。改めて、日本語教師になりたいという気持ちが強くなりました。

F.O.（北海道教育大学函館校）

日本語教育を学ぶ学生のためのHoT-JeT合宿2025

私たちが見た日本語教育の現場と魅力　～北海道日本語学院札幌本校～

2025年9月10日～11日、北海道・東北地域の大学で日本語教育を学ぶ大学生・大学院生8名が札幌に集まり、合宿を行いました。合宿では、札幌市内にある日本語学校2校を訪問させていただきました。学校や授業の様子を見学し、講師の方々に直接お話を伺うことで、日本語教育の実際の現場とその魅力を学ぶ貴重な機会となりました。本記事では、その体験を学生の視点からご紹介します。

学校の概要・特色

北海道日本語学院札幌本校　https://h-nihongo.org/

札幌駅から地下鉄で約10分の場所に位置する「北海道日本語学院札幌本校」は、2015年に開校し、今年で開校10年目を迎える日本語学校です。栃木には姉妹校があります。こちらの学校では、「よく学び、よく遊び、よく感じる」をコンセプトに、言語学習だけでなく、文化体験やアクティビティを重視したカリキュラムが組まれています。こちらの学校では学生のニーズに応じた多様な学習コースが用意されており、入学時期も年3回（4月・7月・10月）から選べます。主な学校の特徴は2点あり、充実した行事やアクティビティと、学習者の国籍です。まず、北海道ならではの体験ができる行事・アクティビティが非常に充実しています。七夕や初詣、書道などの日本文化体験はもちろん、北海道ならではのスノーアクティビティやアイヌ文化に触れる体験学習、さらに学生だけではなかなか訪れにくい郊外への遠足などがあります。これらは学習者からも高い評価を得ており、他校では中々見られない特徴だと感じました。続いて学習者の出身地についてです。こちらの学校では、台湾22%、米国13%、ロシア・中国が各8%、香港・ネパールが各7%といった割合です。全体では20～30か国以上からの学生が在籍していますが、他の多くの日本語学校では東南アジア出身の学生が大半を占める中、米国出身の学生が13%と高い割合を占めており、さまざまな背景を持つ学生たちが交流する、多文化共生の環境が整っている点が特徴です。実際に校内を見学して印象的だったのは、学習者のサポート体制が非常に整っているということです。地元大学生ボランティアが作成した「おすすめスポットマップ」やアルバイト求人情報掲示、自習室やプライベートレッスン用教室が整っており、学生の不安に寄り添おうという学校の姿勢が感じられました。

授業見学

今回見学したのは、今年の4月に入校したばかりの学習者20名による初級クラスです。使用教材は『みんなの日本語　初級Ⅱ　第2版』第27課「可能動詞」。日本語をゼロから学び始めた学習者たちが、明るく活発な雰囲気の中で授業に取り組んでいました。まず印象的だったのは、学習者と教師の距離の近さです。授業の最中でも学習者が気軽に声をかける姿が見られました。その都度、教師が明快かつ簡潔に答えるため、確実に理解が深まっていることが感じられました。さらに教師は机間巡視の際、学習者の回答が間違っている場合でも優しく訂正して、自信を持たせていました。全体で答え合わせをする際には、その学習者をあえて指名して発言させるなど、前向きな学習態度を育てる工夫が見られました。また、授業中に扱う例文が北海道に関連した内容でした。観光地や日常生活に密接した場面を題材にすることで、学習者が自分の生活とつなげて理解できるよう配慮されていました。こうした題材は、学習者にとって身近で親しみやすく、日本語学習のモチベーションを高める効果があると感じました。授業後には、学習者との交流会にも参加させていただきました。レクリエーションを通して見えてきたのは、学習者一人ひとりの明るさと元気の良さです。「楽しく日本語を学びたい」という姿勢が全身から伝わってきて、教師と共に学びの時間を心から楽しんでいる様子が印象的でした。教師と学習者が一体となって日本語を学び続けていることが、この学校全体の明るさを支えているのだと実感しました。

今回の授業見学と交流会を通じて強く感じたのは、この学校が「明るく、楽しく、そして安心して学べる場」であるということです。北海道で日本語を学びたいと考える人にとって、この学校はきっと心強い選択肢になると思います。

講師インタビュー

北海道日本語学院札幌本校で講師をされている2名の先生にインタビューをしました。お話の中で特に印象的だった回答をご紹介します。

Q.なにか外国語を話すことができますか？（日本語教師になるために必要だと思いますか？）

S先生は、英語とタイ語が話せるそうです。また、「必ずしも話せるスキルが必要ではなく、その言語を話せなくても学んだ経験が大切」と答えてくださいました。この言葉を聞いた時、自分は日本語以外の言語を学んだ経験はあっても話せないと意味がないと思っていましたが、考えが変わりました。実際、日本語以外の言語を話せない日本語教員の方もいるそうです。教えたいという強い気持ちが重要だと学びました。

Q.若い人材が入ることで日本語教育や学校として良いことはありますか？

日本語学校には、10代～70代と様々な年齢の方たちが在学しています。S先生は、「学習者との年齢が近いことで、分かり合えることがある。年齢関係なく、学習者が話しやすいと思える人であることが大切。」と答えてくださいました。確かに、今回見学をしていて年齢層が幅広いと感じ、学習者同士のコミュニケーションの様子を見ていても、年齢関係なくコミュニケーションを取っていました。この回答を聞いて、教員と学習者共に、年齢に関係なくいつでも何歳からでも学びを始めることができると気づきました。

Q.日本語教員に向いている人はどんな人ですか？

S先生は、「コミュニケーション能力・向き合う気持ちがある人だと思う。」と答えてくださいました。S先生が指すコミュニケーション能力は、学習者とはもちろん教員同士のコミュニケーションも含まれます。S先生は、学習者にまんべんなく向き合うことが大切だと仰っていました。この話を聞いて、学習者の情報共有や、誰とでも話せる環境づくりを自分でできることが信頼に繋がるのだと考えました。

Q.教師になった当初ぶつかった壁や苦労したことは何ですか？また、それをどうやって乗り越えましたか？

T先生は教師になった当初、授業準備の大変さに加えて「当たり前の違い」に苦労したといいます。日本では当然と思われることも、学習者の出身国や文化によっては通じないことも多く、そのたびに試行錯誤を繰り返してきたそうです。「国や人によって”当たり前”は違う」と気づいてからは、その違いにぶつかりながらも学習者の気持ちを尊重し、丁寧に向き合う姿勢を心がけているとおっしゃっていました。対学習者に限らず、答えを急がず互いに理解し合おうとすることが大切なのだと学びました。

Q.日本語教師としてのやりがいは何ですか？

T先生が日本語教師として最もやりがいを感じるのは、学生からの「わかった！」という一言だそうです。授業のために何時間もかけて準備した内容が、学習者の理解につながったと感じたとき、大変さも一瞬で吹き飛ぶと笑顔で答えてくださいました。また、卒業する学習者が「迷惑をかけましたが、先生に教わったことが今すごく役に立っています」というメモを渡してくれた、というエピソードも話してくださいました。日々の学びを通して少しずつ成長していく姿をそばで見守り、その過程を一緒に歩めることもこの仕事ならではの魅力なのだと改めて感じました。

訪問の感想

今回の日本語学校の訪問を通して、日本語教師という仕事の魅力をこれまで以上に深く感じることができました。普段の授業ではなかなか知ることのできない、学校全体のあたたかく明るい雰囲気や積極的に授業に参加する学生たちの生き生きとした様子を見ることができ、とても印象に残りました。また、インタビューをさせていただいた際には、先生方が楽しそうに学生とのエピソードや教師としてのやりがいをお話してくださり、その姿からこの仕事への誇りや愛情が強く伝わってきました。今後も学びを重ねながら、自分らしい日本語教師像を築いていけるよう、一歩ずつ努力を重ねていきたいと思います。

K.K.（北海道教育大学函館校）

今回の日本語学校への訪問を通して、日本語教育という大きな分野への視野が大きく広がったと実感しました。特に、北海道に関連した例文を取り入れた指導は、学習者の生活に直結した学びを生み出しており、大学で日本語教育を学ぶ私にとって大変参考になりました。日本語学校での交流会では、学習者の元気や前向きな姿勢に触れるとともに、教師との距離の近さや教室全体の明るい雰囲気が強く印象に残りました。このように楽しく日本語を学べるランゲージスクールが今後さらに増えてほしいと感じると同時に、将来は私自身も学習者と共に楽しみながら学べる日本語教師になりたいと強く思いました。今回の訪問は、私にとって非常に貴重な経験となりました。

S.R.（東北学院大学）

今回の訪問で一番印象に残ったことは授業見学でした。日々大学で教案や模擬授業に取り組んでいますが、教員からのフィードバックを活かすことが出来ず「現場見学」が私には足りていないと感じていました。そこで今回、見学をさせていただいて、FBの活かし方、リアルな現場での授業の流れ、時間配分、教えるときの工夫まで学ぶことができ、とても貴重で充実した経験となりました。先生へのインタビューや学習者とも沢山関わることが出来て大変勉強になりました。今後はこの学びを活かし、学習者にとって楽しく、中身の濃い授業を届けられるよう実習に向けて精進して参ります。

E.M.（東北学院大学）

自分はまだ、実習や教案作りなどの経験をした事がなく、何もかもが初めて見る光景でした。今回、北海道日本語学院札幌本校を見学させて頂いた事で、自分が教壇に立って授業をするというイメージが想像でき、実習に向けて意欲が増しました。大学で授業を受けるだけでは知ることが出来なかった、教員の方からの現場にいることで分かる大変さや、教えることの楽しさを自分の目で見ることができ、とても良い経験になりました。また、教員の方々にインタビューをさせて頂き、自分が1番気になっていた教員が日本語以外の言語を身につける必要性についての考えを伺うことができました。この合宿で吸収した、学びと気づきを最大限に今後の学習に活かしていきます。

O.K.（東日本国際大学）

日本語教育を学ぶ学生のためのHoT-JeT合宿2025

私たちが見た日本語教育の現場と魅力　～東洋国際文化アカデミー～

2025年8月24日～25日、北海道・東北地域の大学で日本語教育を学ぶ大学生・大学院生8名が仙台に集まり、合宿を行いました。合宿では、仙台市内にある日本語学校2校を訪問させていただきました。学校や授業の様子を見学し、講師の方々に直接お話を伺うことで、日本語教育の実際の現場とその魅力を学ぶ貴重な機会となりました。本記事では、その体験を学生の視点からご紹介します。

学校の概要・特色

法務省告示校　学校法人　曳地学園　東洋国際文化アカデミー

東洋国際文化アカデミーは2011年に開校した、仙台市内の日本語学校の中では比較的新しい日本語学校です。2025年8月時点での学生数は395人で、10月に10人の学生が入学する予定だそうです。在籍している学生は、ネパール、スリランカ、バングラデシュの方が多く、高校卒業後すぐに来日した若い方や大学院を卒業した後、社会人になってから来日した方など幅広い年代がいます。その他に中国、カナダ、アメリカの学生が1名ずついたりと、国籍や文化、年齢を越えて様々な学生が在籍しているそうです。

学生の卒業後の進路としては90%が専門学校で、その多くが自動車系、ビジネス系の専門学校に進学するそうです。日本で働き、日本で生活していきたいと考える学生のニーズに答えるため、日本語の習得だけでなく、日本で生活するためのルールやマナーの教育にも力を入れている学校です。

授業見学

今回見学したのは中上級レベルのクラスで、教材には「『TRY！日本語能力試験 N3 文法から伸ばす日本語』(アスク出版、2014年)」が使用されていました。授業はすべて日本語で進められ、先生からは教材のページ指定や取り組む課題の説明が繰り返し丁寧に行われていました。授業の進行は比較的速く、学生たちはしっかりと耳を傾けながら内容を理解しようとする姿勢が見られ、高い集中力と日本語能力がうかがえました。

教室内は明るく落ち着いた雰囲気で、特徴的だったのは、学生が問題に取り組んでいる間にも先生が一人ひとりに声をかけ、学習内容への理解を促すと同時に、コミュニケーションを通じて学生が集中して、主体的に授業に参加できるようサポートしていた点です。授業では、文法や語彙の解説に加えて、学生自身にその語の意味を他の言葉で言い換えさせる活動が取り入れられていました。このような指導法は、受け身にならずに「日本語を使う力」を養ううえで効果的であり、語彙の意味理解と定着につながっていると感じました。

さらに、授業中には学生が自由に発言しやすい雰囲気があり、答え合わせの場面では、間違っている学生に対して別の学生が自然にフォローする様子も見られました。教室内には互いに助け合おうとする姿勢があり、温かく協力的な学習環境が形成されていました。

先生は常に笑顔で学生に接しており、親しみやすい雰囲気を保ちながらも、遅刻などの日本で重視されるマナーに関してはしっかりと注意していました。その姿勢には、信頼関係を築きながらも学習の場としての規律を保つ、メリハリのある指導方針が感じられました。

学生と先生の距離が近く、また学生同士のつながりも強く感じられ、より実践的で相互理解の深い学びの場であるように感じました。全体を通して、学生一人ひとりの学びを尊重し、参加を促す工夫が多く見られた貴重な体験でした。

講師インタビュー

「“生きていく”ための日本語教育」

「全くわからない状態から日本語を学び始める学生が多いので、理解できているかを確認することが大切です」と語るのは、現在、日本語教師として主に初級の授業を担当する先生です。授業では、日本で生きていくことを意識して、生活に直結した「コミュニケーション力の向上」を目指しているそうです。例えば、タクシーに乗る場面では、行き先の伝え方や支払い方法の練習を通じて、実生活に役立つ力を養っているとお聞きしました。また、商店街のお祭りでお神輿を担いだり、サクランボ狩りに行くなど、イベントへの参加や開催にも力を入れているといいます。こうした活動は、日本語を使うだけでなく、文化やマナーを学ぶ場にもなっており、地域の人々とのつながりをつくる貴重な機会となっているとのことでした。

「今でも授業をすることに不安があります。だからこそ、勉強し続けることが大切だと思います。」と語る先生の姿が印象的でした。不安と向き合いながら教え続ける姿勢に尊敬の念を抱くと同時に、不安があるからこそ自己成長ができるのだと思いました。インタビューを通して、学生のことを常に考え、学習だけでなく生活面でも支えている姿勢が強く伝わってきました。毎日いろいろなことが起こる現場で、学生とともに成長していく先生の姿に、日本語教育の奥深さと面白さを感じました。

「〇をつけるにも覚悟がいる」

「日本語教師は俳優のようなもの」と語るのは、現在、日本語教師として上級クラスを担当する先生です。教室では、表情や身振り、絵を使いながら「ことば」を伝える毎日。時には演じ、時には心を鬼にしながら、学生と真剣に向き合っていらっしゃいました。教室の雰囲気もどこか家族のようで、先生が親で、学生が兄弟姉妹のような関係に感じられました。そこには、日本語を学ぶだけでなく、マナーやルール、生き方まで伝えようとする、あたたかさと覚悟がありました。

とくに心に残ったのは、「〇をつけるにも覚悟がいる」という言葉です。評価はただの作業ではなく、相手の成長を想像しながら行うという考えに共感しました。学生の突拍子もない言動に内心おもしろさを感じつつも、きちんと注意するその姿には、教育者としてのプロ意識が感じられました。また、年上の学生に対してもごまかさず、誠実に対応してきたという先生のお話からは、信頼関係が積み重ねの中で築かれていることがよくわかりました。

訪問の感想

今回の合宿では多くのことを得られました。授業見学させていただいた際、できないところは何回も言ったり、時には例を出してわかるまで寄り添うのに対し、授業に遅れた学生にはビシッと注意していたのが印象的でした。インタビューさせていただいた先生もマナー面というところを重要視されており、「人として」という部分は日本語教員を目指す上でことばを教えるよりも強く意識するポイントなのだと感じました。また、生徒との信頼関係を築き、明るく居心地の良い教室を作られていて、その他にも参考になったことがたくさんあって貴重な時間でした。

Y.S.（北海道文教大学）

日本語学校を見学した際、特に興味深かったのは、教室の掲示物です。漢字が苦手な学生が多いようで、「今週の漢字」として学んだ漢字が掲示されており、学習をサポートする工夫が感じられました。また、110番が警察で119番が消防・救急であることを示した掲示物や、自転車の乗り方、ごみの分別など、生活に役立つ情報が多く貼られており、見ていて面白かったです。日本語を教えるだけでなく、日本の文化やマナー、ルールを伝えることも日本語教師や日本語学校の重要な役割であると感じました。

M.Y.（北海道教育大学函館校）

私はこの合宿を通して、日本語学校によって特色があり、学生の国籍や学習目的が異なることを学びました。例えば、私が住んでいる地域の近くでは中国や韓国、台湾など東アジアの方が多いですが、東洋国際文化アカデミーには南アジアの学生が多いという違いがありました。私は今回、初めての日本語学校訪問でしたが、想像よりはるかに学生が楽しそうに日本語を学んでいる様子を見て、実際に行ってみたり、在校生や先生方と交流したりすることでしか得ることのできない学びがあるということを改めて実感しました。

M.S.（札幌国際大学）

今回の合宿で初めて日本語学校を訪問し、身近なところにも文化の違いがあることを実感することができました。授業見学中、多くの学生が黒鉛筆を使っていたのが印象的で、先生に理由を伺うと、出身国では文房具にお金をかける習慣や鉛筆を使う文化があまりないとのことでした。日本では試験等で鉛筆の使用が求められるため、学校で指導しているそうですが、赤青鉛筆などを持つ学生は少ないそうです。こうした文房具にも文化的な違いが表れることに驚きました。また、授業の雰囲気や先生と学生の関わり方も新鮮で、貴重な学びとなりました。

S.M.（東北学院大学）

日本語教育を学ぶ学生のためのHoT-JeT合宿2025

私たちが見た日本語教育の現場と魅力　～仙台国際日本語学校～

2025年8月24日～25日、北海道・東北地域の大学で日本語教育を学ぶ大学生・大学院生8名が仙台に集まり、合宿を行いました。合宿では、仙台市内にある日本語学校2校を訪問させていただきました。学校や授業の様子を見学し、講師の方々に直接お話を伺うことで、日本語教育の実際の現場とその魅力を学ぶ貴重な機会となりました。本記事では、その体験を学生の視点からご紹介します。

学校の概要・特色

学校法人　日本コンピュータ学園　仙台国際日本語学校 https://www.sjls.ac.jp/

仙台駅から徒歩5分に位置する仙台国際日本語学校は、図書室、PCルーム、食堂などの充実した設備を備えています。定員は300人で、クラスは16クラスあります。学生の出身国は20か国と多様で、その構成比はネパールが48%、ベトナムが13%、バングラデシュとパキスタンが8%と、半数近くをネパールが占めています。

こちらの学校では、教務課と支援課に業務が分かれており、充実した学生サポートを可能にしています。 入学時のアパート入居や役所での手続き、生活の困りごとの相談や、アルバイトの紹介、病院への付き添いなど異国で生活する留学生が安心して暮らせるように手厚いサポートを行っています。

さらに、特色ある「iタイム」やプロジェクトワークという授業があります。iタイムはそれぞれの先生が自由に内容を考えて行う授業です。早口言葉やかるた、習字、ビジターセッション、自分で物語をつくるなど、様々な内容となっています。プロジェクトワークは、教科書に沿って週に1～2度行う授業で、パワーポイントを使った発表やビデオの制作などを行います。どちらの授業も、学生が日本語を楽しんでアウトプットでき、日本文化に親しみながら言語運用能力を伸ばすことができそうな授業だと感じました。

授業見学

私たちは多読のクラスと初中級クラスを見学させていただきました。多読の授業で使用されていた図書室には、学生が授業で作成した本も展示されており、学びの成果を共有できる場になっていました。初中級のクラスでは教師の問いかけに対して、学生が積極的に発言している様子が見られ、活発で前向きな雰囲気が感じられました。授業では複数の文型が扱われていましたが、教師の方は言い換えや身近な例を交えながら、分かりやすく説明していました。

また、今回の訪問では学生と交流する機会も設けていただきました。交流の場では、大学生と留学生が「互いに勉強していること」や「努力していること」などについて語り合いました。さらに、留学生の母語で大学生が自己紹介をするという活動も行われ、留学生が先生役となる場面もありました。私たちは今回ネパール語での自己紹介を教えてもらいクラスで発表しましたが、初めて勉強する言語を話すのには勇気が必要であることを改めて実感しました。発音や表現を教えてもらい、不安を感じながらも勇気を出して話した言葉が伝わったと感じた瞬間は、不安が吹き飛ぶような嬉しさがありました。今回学ぶ側として経験した、この「嬉しさ」を感じる瞬間に身近で立ち会うことのできる職業が日本語教師だと思います。この交流は、言語を学ぶ人の努力や勇気に寄り添い、その成果を一緒に喜べる存在としての日本語教師の側面を強く意識する貴重な経験となりました。

講師インタビュー

「一人ひとりと向き合う日本語教育」

このインタビューを通して、I先生の学習者の方に寄り添う姿勢が強く印象に残りました。I先生は、教案作成や授業外の進路相談など、様々な業務を抱える中でも学習者の方とのコミュニケーションは欠かさずに行い、学習者の方の

国のことや学校外での様子などを積極的に聞くようにしているそうです。授業の中で「そういえば、以前こんな話をしていましたね。それをこのように言い換えてみましょう」といった形で、授業外の話題を活用することができるとのことです。このような授業外の時間での交流が、教師と学習者の信頼関係を築き、学びを深める上で大切なのだなと感じました。同時に、日本語を教えるだけでなく、一人ひとりの人生や背景に寄り添おうとする姿勢が感じられました。さらに将来日本語教師を目指す学生に向けてアドバイスがあるかお聞きしたところ、日本語教師の基本である日本語文法はしっかりと勉強をする必要があるとおっしゃっていました。そのうえで、学生のうちに様々な教材に触れることも重要であるとのことです。I先生自身も慣れない教材での教案作成に苦労しているそうで、自分なりに教案作成をしたり教材の特徴を調べてみたりすることを勧めていました。

ただ日本語を教えるのではなく、一人ひとりの声に耳を傾けながら教えていく必要があると感じました。I先生の言葉に触れ、私もまた、様々な教材に触れながら教材を活用する力を養っていきたいと感じました。

「日本語教育と多文化共生」

「学習者たちが勉強をし、専門学校や大学に進んで、就職して日本の社会に溶け込んでいく中で・・・」と、学習者の人生設計を見据えながら話してくださったのはT先生です。日本語教育が今後どのようになっていくべきかという質問に対して、T先生は深く悩みながら、このように話してくださいました。「外国人だから分からないと思われてごまかされ、嫌な思いをする学生もいます。一方で、学生たちも夜にうるさくしたりごみ捨てのマナーが悪かったりして、日本人に迷惑をかけることもあります。」T先生はお互いが幸せな形で生活していくにはお互いをもっと知ることから始めるべきだとおっしゃっていました。そのために私たちができることについても尋ねるとT先生は「日本語教師ってなんですか？という風に聞かれるとき、もっとこの仕事が広く知られていく必要があると感じます。」とおっしゃっていました。私自身も、日本語教師と国語教師の違いを尋ねられた経験があり、この職業が世間には周知されていないと感じることが多々ありました。日本語教師という仕事とその魅力を、日本語教育に携わっている人に限らず、もっと多くの人に知ってもらいたいという思いから日本語教師を目指した私の気持ちと、重なる部分がありました。また、仙台国際日本語学校さんでは、ブログ活動を行っています。これは「仙台国際日記」というもので、学内での数々のイベントが記録されています。この活動は、日本語教育を地域の人に知ってもらうという点でとても有意義なものだと感じました。

T先生へのインタビューを通して、「日本語が母語ではない人に日本語を教える」という意味以上に、日本語教育が多文化共生という広い意味をもって発展していくべきだと感じました。地域との交流を増やして日本語教育の世界をもっと知ってもらうことが、日本語教育の未来への第一歩につながるのではないでしょうか。

訪問の感想

日本語学校でのアシスタント経験はありましたが、学生の方々との交流会や講師の方へのインタビューは初めてだったので、とても新鮮でした。学生の方々の互いに学び合う姿勢と、積極的に発言する姿勢がとても印象的でした。誰かがわからないことは別の誰かが手助けをすることで、クラスメイトとしての絆がとても強く感じられました。常に活気のあるクラスの雰囲気が素敵でした。自身の学習のモチベーションにもつながる、とても素敵な経験でした。

M.T.（北海学園大学）

日本語学校での現場を体験し、日本語教師の新たな魅力を発見することができました。学習者の方と交流した際には、ベトナム語とネパール語を学習者の方から教わり、日本語にはない発音の仕方に難しさを感じました。しかし、教わった通りに自己紹介をすると笑顔で応答してくださり、相手の言語を使って相手に伝わる喜びを実感しました。授業中には、教師の方が学習者の方の身近な質問を問いかけており、話の膨らませ方にも感銘を受けました。

A.H.（北海道教育大学函館校）

日本語教育の現場を見学し、実際に働く先生方やそこで学ぶ学生と交流できたことはとても貴重な経験でした。インタビューや授業・校内の見学を通して、学生へのサポートが充実しており、学びやすい環境が整っていることを強く感じました。また、日本語そのものの習得だけでなく、日本での生活支援も充実しており、それが学生と地域を繋ぐ大切な役割を果たしているのだと思いました。

S.M.（国際教養大学）

今回初めて日本語学校を訪問し、学校や授業のあたたかい雰囲気がとても印象に残りました。授業を見学して、日本語教師の方は学習者が興味をもって取り組めるように内容を工夫していると感じ、学習者が楽しそうに勉強をしている姿が心に残りました。日本語教師の方に直接インタビューするという貴重な機会もいただけて、日本語教育への関心がますます高まりました。

M.K.（岩手大学）

2025 年度 HoT-JeT 実施イベントの報告

HoT-JeT では、2025 年度に右表のようなイベントを実施しました。ここでは特に、仙台と札幌で実施した第 1 回 HoT-JeT 研修会と、オンラインで実施した日本語教師を目指す人のためのキャリアセミナー 2025 についての開催報告を掲載します。日本語教育を学ぶ学生のための HoT-JeT 合宿 2025 についての詳細は、本紙 10 ページからをご覧ください。第 2 回 HoT-JeT 研修会についての詳細は HoT-JeT ウェブサイトをご参照ください。

HoT-JeT 実施のイベントの報告の詳細についてはこちらからご覧ください。

https://www.hot-jet.jp/training/

令和 7 年度第 1 回 HoT-JeT 研修会　開催報告

令和 7 年度第 1 回研修会が、仙台会場（6 月 8 日）および札幌会場（6 月 29 日）にて開催されました。今回のテーマは「これからの日本語教員養成―登録日本語教員養成機関 / 実践研修機関への申請とその先へ―」。変化の続く制度の中で、日本語教員養成に携わる機関が今後どのような課題と向き合い、何を目指していくのかについて、参加者同士が知見を共有し合う機会となりました。会場には、大学や日本語学校など、主に北海道・東北地域の関係者が集い、仙台会場には 29 名、札幌会場には 21 名（主催者側を含む）の参加がありました。冒頭では、HoT-JeT の活動報告とともに、本研修会の趣旨説明が行われました。続いて、登録申請を完了した青森大学・東日本国際大学・東北大学の関係者より、各機関の申請時の工夫や課程設計の実際について発表がありました。実践に基づいた報告を通じて、参加者は申請準備や運営のヒントを得ることができたようです。

午後のプログラムでは、「認定日本語教育機関で求められる教師像とこれからの人材養成」をテーマとしたパネルセッションが行われました。大学と日本語学校の両方から登壇者を迎え、それぞれの立場から育成方針や期待される人材像について意見が交わされました。仙台会場では雲村花里氏（仙台日本語アカデミー）、札幌会場では勝木悠里氏（北海道 HSL 日本語学校）も加わり、経験の浅い若手教師の視点からの発言が印象的でした。

最後のネットワーキングセッションでは、小グループに分かれて、申請に向けた準備状況、機関同士の連携の可能性、講座運営の課題などについて活発な意見交換が行われました。制度改正の波の中、参加者間で情報を共有し、支え合う関係づくりの一歩となるような時間となりました。

2025/6/8	令和 7 年度第 1 回 HoT-JeT 研修会（仙台会場）
2025/6/29	令和 7 年度第 1 回 HoT-JeT 研修会（札幌会場）
2025/8/24 ～ 25	日本語教育を学ぶ学生のための HoT-JeT 合宿 2025（東北大学）
2025/9/10 ～ 11	日本語教育を学ぶ学生のための HoT-JeT 合宿 2025（藤女子大学）
2025/11/8	日本語教師を目指す人のためのキャリアセミナー 2025（オンライン）
2026/2/14	令和 7 年度第 2 回 HoT-JeT 研修会（仙台会場）

日本語教師を目指す人のためのキャリアセミナー 2025 開催報告

2025 年 11 月 8 日（土）に HoT-JeT 主催「日本語教師を目指す人のためのキャリアセミナー 2025」をオンライン（Zoom）で開催しました。北海道・東北地方の大学を卒業し、日本語教育の現場で活躍している 3 名の先輩方をお招きし、現在のお仕事や就職活動についてお話しいただきました。当日は、北海道・東北地域の大学・大学院の学生など、計 32 名の参加がありました。

まず、3 名の登壇者がこれまでの経験や現在の業務についてご紹介くださいました。海外日本語学校、国際交流基金の日本語パートナーズ派遣、国内日本語学校、日本語学校の事務職といった、様々な現場のお話を聞くことができました。その後、登壇者ごとのブレイクアウトルームに分かれ、質疑応答を 2 セッション行いました。どのルームでも多くの質問が寄せられ、登壇者が丁寧に回答してくださいました。最後に、各ルームで出た質問と回答を全体で共有しました。

参加者アンケートからは、先輩方から直接経験談を聞くことで、日本語教育のキャリアの幅広さと魅力が伝わり、モチベーションにつながったことがうかがえました。日本で、海外で、そして様々な立場で「日本語教育」に関わっている登壇者のお話から、日本語教育の多様性が実感できました。

日本語でつながる未来

文部科学省　日本語教師養成・研修推進拠点整備事業

北海道・東北ブロック 日本語教師養成実施機関連絡協議会（HoT-JeT）

HP: https://www.hot-jet.jp
Email: hot-jet@grp.tohoku.ac.jp
住所：〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1
東北大学大学院文学研究科日本語教育学研究室内
TEL：(022)795-5994

HP

発行日：2026 年 2 月 27 日